

宍道湖のシジミ漁／『里湖・八郎湖』の再生を思う

谷口吉光（秋田県立大学）

1 1月の晴れ渡った朝、波ひとつない宍道湖の湖面にたくさんのシジミ漁の船が見える。船の上に立った漁師が8メートルもあるさおの先に「じょれん」という大きな熊手のような道具を付けて人力で湖底を引きかき、砂の中のシジミを掘り出している。大変な力作業だが、見ている分には、力を込めてゆっくり砂をかくその動作はのどかな宍道湖にぴったりの風物詩だと思ってしまう。

「宍道湖には現在約280人のシジミ漁師がいて、決められた時間と日数の下でこうやって漁をしているんだ」と解説してくれるのは平塚純一さん。宍道湖の自然環境や漁業に詳しい地元の活動家であり研究者だ。

今回私は、京都にある総合地球環境学研究所のプロジェクトに参加して、富栄養化問題を抱える琵琶湖（滋賀県）、八郎湖（秋田県）、宍道湖（島根県）、印旛沼（千葉県）の比較研究をすることになり、その関係で初めて宍道湖に視察に来たのだ。平塚さんの案内で、研究仲間と一緒に2日間かけて宍道湖と隣の中海を車と船で回った。

短い時間だったが、八郎湖と宍道湖が干拓による農地造成という戦後農政の大きな動きに翻弄（ほん・ろう）されながら、対照的な運命をたどったことがよくわかった。干拓前の八郎潟と宍道湖はどちらも日本海につながる汽水湖だったが、八郎潟は干拓によって淡水化され、湖水面積も20%に減らされた。他方、宍道湖にも1950年代から中海の干拓計画に関連した淡水化計画があったが、地元の反対運動によって半世紀後に計画は中止された。

八郎潟では干拓と淡水化が両方実現し、大潟村が生まれた一方で、残された八郎湖は慢性的な富栄養化、アオコの発生、植物群落の消滅など深刻な環境問題に悩まされている。それに対して宍道湖は干拓と淡水化をともに免れ、汽水湖のまま残り、全国最大のシジミ産地の座を手にした。私が今見ているのどかなシジミ漁の風景は、宍道湖がたどった歴史の結果として生まれたものだったのだ。

「うらやましい」という言葉がつい口から出てしまう。干拓前の八郎潟にもたくさんのシジミがいたが、淡水化されて消滅してしまった。「干拓されていなければ、八郎潟だって宍道湖に負けないシジミ産地になったかもしれない」という考えが頭をよぎる。50年かかっても干拓計画を止めた中海の話を知れば、「今からでも八郎湖の漁業を再生させる方法があるのではないか」という思いが募る。

案内役の平塚さんは「里湖（さと・うみ）」という魅力的な言葉を考案者でもある。里山という言葉をもじって、人間が手を加えながら持続的に管理してきた内海や湖沼を「里湖」と名付け、里湖の崩壊と再生について長年研究してこられた（平塚純一他著「里湖モク採り物語」）。

八郎湖を里湖として再生させるにはどうしたらいいか。他の湖沼の経験に学びながら、秋田の人びとの意見を聞きながら、これからも考えていきたい。